

〈研究ノート〉

世界市場における「制度設定者のレント」をめぐる

—資本主義における「制度設定者のレント」—

杉崎 京太

- 1、はじめに
- 2、「制度としての市場」における「クリエイターズ・レント」の所在
- 3、小 括

1、はじめに

市場競争は、「プレイヤーズ・レント」を最小化し、市場競争を制限する独占の形成は、「プレイヤーズ・レント」を増加させる。新古典派は、価格メカニズムの均衡形成に着目してきたが、制度設定者の問題を不問に付してきた。市場は所与のものとして扱われ、市場内部でのプレイヤーの行動をめぐる議論は、詳細に行われてきたものの、市場そのものへの省察は十分には行われてこなかったといっても過言ではない。あらゆる組織における制度構築の過程でもたらされる「クリエイターズ・レント」の所在を、特に市場制度において考察する必要がある。その際、実証研究と並行して、「制度としての市場」を考察する枠組みを提示する必要がある。本稿では、「制度としての資本主義」について、これまでの「研究ノート」の延長線上で考察をおこなう。(杉崎、2008、2009、2010、2011) これまでの研究ノート同様、これまでの杉崎論文から抽出した命題を中心としており、その細部の検討は不十分な点を残すが、取りあえず議論を整理するためのものとしてまとめた。細かい注は、今回も省略した。

2、「制度としての市場」における「クリエイターズ・レント」の所在

命題1 「制度設定者のレント」は、「制度としての市場」の初期条件の設定者が獲得するレント（独占的報酬）である。

これまで議論してきたように、いわゆる完全市場ではレントの発生はないと考えられてきた。われわれのいう「プレイヤーズ・レント」の最小化である。このように、市場を「プレイヤーズ・レント」を最小化する場としてとらえ、市場内部のメカニズムを考察する研究は、経済学の主要な対象であったが、市場制度設定者の所在について不問に付してきた。市場は所与のものとして扱われ、市場内部でのプレイヤーの行動をめぐる議論は、詳細に行われてきたものの、市場そのものへの省察は十分には行われてこなかった。あらゆる組織において、その制度構築の過程でもたらされる「クリエイターズ・レント」は、初期条件の設定において発生するレントである。

命題2 「制度としての市場」の初期条件は、市場開設に際しての取引商品と取引要件の決定、制度化要件と秩序確保要件の規定を通じて確定されるが、とくに、参加者の確定、当初価格水準の決定が重要となる。

制度設定の初期条件を重視する研究としては、「経路依存性の研究」があるが、初期条件の設定と「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）の所在は、一見自明なものとして分析されずに置き忘れられてきたといつてよい。

命題3 「制度としての市場」における「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）の源泉は、開設時のプレミアムと、開設後の市場参加者からの手数料収入であるが、市場を介してもたらされる情報を利用したイニシアティブの発揮により、追加利得も発生する。

「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）の源泉は、初期設定におけるプレミアムの獲得にあり、参加者の拡大により、制度設定者の姿は不可視化されるが、情報の非対称性はたえず存在し、制度設定者がイニシアティブをとって、市度転換を一方的に行う局面も生じる。

命題4 「制度としての市場」は「会員制」による参加者規制を撤廃し、入場の自由化を実現することにより、その規模を拡大し、価格メカニズムが機能することになる。

自由放任こそが市場を機能させる基本原則である。しかし、市場とひとことでくくっても、その形態は多様であり、市場内部が完全に自由放任であっても、入場規制がかかっている市場も存在する。どのような市場を設定するのかによって、「制度としての市場」における「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）のあり方も変わってくる。

命題5 自由市場において、“見えざる手”のもとで価格メカニズムが作用すると、「制度としての市場」における「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）の不可視化がすすむことになる。

資本主義経済は単純商品を生産する基礎としての労働力商品化にとどまらず、土地、資本、通貨等、ポラニィのいう「擬制的商品」を市場内に商品化することで、制度形成に伴うレントの発生とその配分を行ってきた。単純商品の市場においては競争によりレントは最小化し、「設定者のレント」は不可視化されるが、「擬制的商品」市場においては、国家の制度設計への関与により「制度設定者のレント」は不可視化される。（杉崎、2011-b）

命題6 多様な「制度としての市場」は、国家的貨幣制度と信用機構のもとで「制序」され、「クリエイターズ・レント」（「制度設定者のレント」）は、国家のもとで不可視化される。

ポラニィのいう「擬制的商品」市場は、個別性にとどまっているが、資本主義は、国家的貨幣制度と中央銀行を中心とする信用機構のもとで、個別市場を関連付け「制序」することにより、一国経済秩序を構成する。これらは、信用論の膨大な研究の蓄積のなかで、すでに明らかにされてきた点であるが、貨幣を媒介として「制度としての市場」を国家的経済システムのうちに「制序」することに伴う、「制度設定者のレント」の所在をめぐる研究は、まだ緒に付いたばかりである。（杉崎、2011）

命題7 世界市場は、世界貨幣と各国通貨を媒介として世界商品の売買を行う市場であるが、情報の集中による「制度としての市場」を設定した市場の中心化と、後発市場の世界市場への参入に伴う周辺化により成層化され、中心部市場参加者の周辺部市場における行動においてレントが発生する。

世界市場における国境を越えた取引により、「クリエイターズ・レント」(「制度設定者のレント」)は不可視化されるだけでなく、中心・周辺関係の形成により、中心部のプレイヤーは、周辺部に置いて、中心部市場と結合する市場を形成することで、二次的な「クリエイターズ・レント」(「制度設定者のレント」)を獲得する。

かくして、「国際的経済関係においては、制度設計者のレントの獲得をめぐる協調と闘争が存在する。」(杉崎、2011-b) プレイヤーズ・レントをめぐる闘争は、その規模を拡大し、国際経済関係のもとでの制度改編の動きを活発化させる要因となる。

“Libsycy Cycle” モデルは、Liberation (自由化)、Independent Process (独立のプロセス)、Bubble (Boom) (バブルの発生)、Synchronized Crisis (危機の同時発生・伝染)、Transformation and Intervention (制度転換と介入) の一連のプロセスの循環を示したものである。(杉崎、2011-a) 制度転換のプロセスにおいて、権力の介入と統治をめぐる問題が顕在化するが、それは「制度設定者のレント」獲得をめぐる闘争が、プレイヤーズ・レント獲得の闘争と連関して広範で根底的なものとなり、そのことによって始原的存在としての「制度設定者」の存在が広く可視化されるためである。

3、小 括——「レントをめぐる範型」の試論

グローバル化のもとで進行する市場制度の再編は、市場機構そのものに反省を与える契機となった。規制緩和の過程と並行して、レント・シーキングな経済行動に関する分析が進み、非市場的「異質な経済」分析にその分析の対象を広げてきた。市場研究が進むなかで、市場機構創出そのものに関わる問題も浮上してきた。これまで不可視とされてきた「クリエイターズ・レント」の可視化である。

その分析は、市場制度の再構築と「クリエイターズ・レント」の再配分の可能性を示すことにもつながる。欲望の体系の結晶としての貨幣を媒介として「制序」された市場機構を、美的心性を通じた信頼の経済へと巡回させ、

類的共同性を交換関係を通じて確認する方途も、「制度設定者のレント」の所在を問い直すことを通じて見出されるに違いない。

参考文献

- 青木昌彦 (1995) 『経済システムの進化と多元性—比較制度分析序説—』東洋経済新報社。
- 青木昌彦／奥野正寛編 (1996) 『経済システムの比較制度分析』東京大学出版会。
- 青才高志 (1990) 『利潤論の展開—概念と機構—』新潮社。
- 石崎昭彦 (1990) 『日米経済の逆転』東京大学出版会。
- 伊藤誠 (2006) 『幻滅の資本主義』大月書店。
- 伊藤誠 (1989) 『資本主義経済の理論』岩波書店。
- 稲富信博 (2000) 『イギリス資本市場の形成と機構』九州大学出版会。
- 宇野弘藏 (1962) 『経済学方法論』東京大学出版会。
- 大内力 (1970) 『国家独占資本主義』東京大学出版会。
- 大内力 (1983) 『国家独占資本主義・破綻の構造』お茶の水書房。
- 大内力 (1991) 『世界経済論』東京大学出版会。
- 小幡道昭 (1988) 『価値論の展開—無規律性・階級性・歴史性—』東京大学出版会。
- 加藤栄一 (1979) 「組織資本主義論と現代資本主義論」『経済評論』1979年7月号。
- 加藤栄一 (2006) 『現代資本主義と福祉国家』ミネルヴァ書房。
- 金子勝 『市場と制度の経済学』
- 河合正弘 (1994) 『国際金融論』東京大学出版会。
- 河村哲二 (1996) 『制度と組織の経済学』日本評論社。
- 工藤章 (1999) 『20世紀ドイツ資本主義』東京大学出版会。
- 菅原陽心 (1997) 『商業資本と市場重層化』御茶ノ水書房。
- 杉崎京太 (1996) 「鉄鋼業の盛衰」、湯沢威編『イギリス経済史』有斐閣。
- 杉崎京太 (1998)、(1999)、(2000)、(2001)、(2002)、(2003)、(2004)、(2005)、(2006-c)、(2007)、(2008-c)、(2009-c)、(2010-c)「研究ノート グローバリゼーションの今日的意味をめぐって (1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)、(11)、(12)、(13)」津田塾大学『国際研究所報』第33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45号。
- 杉崎京太 (2006-a) 「欧州統合下のFDIの展開——「神聖ならざる三位一体」から「歪んだ四面体」の溶解へ——」津田塾大学『国際関係学研究』第32号。
- 杉崎京太 (2006-b) 「研究ノート「グローバリゼーション」と欧州統合の現段階——市場の流動化と社会的規制をめぐって——」津田塾大学国際研究所『総合研究』第4号。
- 杉崎京太 (2007) 「景気循環の収斂と乖離の基礎過程——グローバル化と欧州統合の現段階——」、小

- 川英治編『EU スタディーズ2 経済統合』勁草書房。
- 杉崎京太 (2008-a) 「＜研究ノート＞グローバル化と『制度設定者のレント』をめぐる諸問題—いくつかの命題をめぐって—」『津田塾大学紀要』第40号。
- 杉崎京太 (2008-b) “Convergence and Divergence of Business Cycles in European Integration: Reconsidering the Meaning of ‘Economic Integration’ in the Context of Globalisation”, 津田塾大学『国際関係学研究』No.34。
- 杉崎京太 (2009-a) 「＜研究ノート＞『制度設定者のレント』をめぐる一考察—『内部労働市場論』に関するいくつかの命題をめぐって—」『津田塾大学紀要』第41号 (pp.135-144)。
- 杉崎京太 (2009-b) 「『大転換』再考—『溶解する四面体』モデルとの関連で—」津田塾大学『国際関係学研究』No.35。
- 杉崎京太 (2010-a) 「＜研究ノート＞グローバル資本主義と『制度設定者のレント』—資本主義と制度問題に関するいくつかの命題—」『津田塾大学紀要』第42号。
- 杉崎京太 (2010-b) 「欧州通貨統合と『大西洋回廊』の構築—ドル・ユーロ連結「対環節」の不安定性をめぐって」津田塾大学『国際関係学研究』No.36。
- 杉崎京太 (2011-a) <Research Note> A “Dissolving Tetrahedron” Model and the “Libsycy” Model in the Global Financial Crisis: The Market Creator’s Rent in the EU” 津田塾大学『国際関係学研究』No.37 (pp.1-8)。
- 杉崎京太 (2011-b) 「＜研究ノート＞制度転換における『制度設定者のレント』をめぐって—制度としての資本主義の体系に関するいくつかの命題—」『津田塾大学紀要』第43号 (pp.141-149)。
- 鈴木鴻一郎編 (1960, 1962) 『経済学原理 上下』東京大学出版会。
- 佐美光彦 (1994) 『世界大恐慌』御茶ノ水書房。
- 武井邦夫 (1972) 『利子生み資本の理論』時潮社。
- 立石剛 (2000) 『米国経済再生と通商政策』同文館。
- 玉田美治 (2006) 『フランス資本主義』桜井書店。
- 戸原四郎 (2006) 『ドイツ資本主義』桜井書店。
- 高山与志子 (2001) 『レイバー・デバイド 中流崩壊』日本経済新聞社。
- 中村泰治 (2005) 『恐慌と不況』御茶ノ水書房。
- 中山弘正 (2003) 『現代の世界経済』岩波書店。
- 馬場宏二 (1986) 『富裕化と金融資本』ミネルヴァ書房。
- 馬場宏二 (2005) 『もう一つの経済学 批判と好奇心』御茶の水書房。
- 本間忠良 (1997) 「TRIPS 協定の特殊性 レントの創出と分配のシステム」『貿易と関税』1997年2月号 (pp.34-45)。
- 日高晋 (1972) 『商業資本の理論』時潮社。
- 村上泰亮 (1992) 『反古典の政治経済学 上下』中央公論社。
- 百瀬宏 (1988) 『小国—歴史に見る理念と現実—』岩波書店。

山口重克 (1998) 『商業資本論の諸問題』御茶ノ水書房。

山口重克編 (2004) 『新版 市場経済 歴史・思想・現在』名古屋大学出版会。

湯沢威編 (1996) 『イギリス経済史』有斐閣。

Aoki, M. (2001) *Towards a Comparative Institutional Analysis*. The MIT Press. 瀧澤弘和・谷口和弘訳
(2003) 『比較制度分析に向けて』NTT 出版。

Coase, R.H. (1988) *The Firm, The Market, and the Law*. The University of Chicago Press. 宮沢健一／後藤
晃／藤垣芳文訳 (1992) 『企業・市場・法』東洋経済新報社。

Greif, A. (2005) *Institutions and the Path to the Modern History*. Oxford U.P. 岡崎哲二／神取道宏監訳
(2009) 『比較歴史制度分析』NTT 出版。

Keohane, Robert O., *After Hegemony*, 1984 Princeton. 石黒馨・小林誠訳 (1998) 『覇権後の国際政治経済学』
晃洋書房。

North, D. (1990) *Institutions, Institutional Changes and Economic Performance*. Cambridge U. P. 竹公視訳
(1994) 『制度・制度変化・経済成果』晃洋書房。